

その1 米州開発銀行沖縄総会の 実現に向けて始動！

米州開発銀行（IDB） 総裁の沖縄訪問

先頃、イグレシアスIDB総裁が沖縄を訪れました（平成十四年六月一日）。訪問の目的は、沖縄県から要望のあった二〇〇五年総会の沖縄県での開催の可能性の検討のためであり、沖縄県知事をはじめ、経済界等の要人と懇談するほか、総会の開催予定会場等を視察するというものでした。

IDBとは

IDBという、一般にはなじみが薄いと思われるが、中南米地域の開発途上国の経済的・社会的開発の促進に寄与することを目的として設立された国際開発金融機関で、本部はワシントンにあり、域内二十八か国、域外十八か国の四十六加盟国で構成されています。わが国は一九七六年七



沖縄コンベンションセンターを視察する
イグレシアス総裁

月に他の域外国とともに加盟しています。現在では域外国中第一位の出資国として積極的な貢献を行っています。



首里城を視察する総裁

誘致の理由

沖縄県で何故IDB総会かという、沖縄県は、日本国本土と東アジア・太平洋諸国との結節点に位置し、十五世紀に遡る琉球王国時代にはこれらの国々との交易を通じ繁栄を誇ってきた歴史があります。二十世紀になってからはその軍事戦略上の重要性から「太平洋の要石」と呼ばれてきました。現在、「太平洋・平和の交流拠点（パシフィック・クロスロード）」へと転換を図っています。このような中、二〇〇〇年七月には、「九州・沖縄サミット首脳会合」が沖縄県で開催されました。その「サミット首脳会合」の成果を踏まえ、沖縄県の振興発展と国際リゾートコンベンション・アイランドとしての大きな飛躍の契機とするため、二〇〇五年の年次総会を沖縄県で開催するよう要望しているものです。

沖縄と中南米との関係

中南米という非常に遠い感じがしますが、沖縄県は日本国有数の移民県で、特にブラジル、ペルー、アメリカ合衆国等の南米、北米を中心に世界各国において、二十九万人余の沖縄県系人が各方面で活躍

しており、そのため、五年に一度、沖縄県で「世界のウチナーンチュ（沖縄県出身者）大会」が移民一世を含め約四千人が参加して盛大に催されるなど、文化・経済面でのネットワークが築かれています。

政府の取組み

こうしたことから、政府としては、平成十二年六月二十日に国際会議等各種会議の沖縄開催の推進について閣議了解し、宮沢蔵相がイグレシアス総裁に沖縄開催を要請したほか、去る三月十一日、十三日に開催されたブラジル・フォルタレザ総会では、わが国の総務演説において、二〇〇五年のIDB総会を沖縄に招致したい旨、昨年に引き続いて表明するなどIDB総会の沖縄誘致にむけて沖縄県とともに積極的に取り組んでいます。



総裁と沖縄県・経済界首脳との会談

IDB総会とは

ところで、IDB総会とはどのようなものかという、IMF・世銀総会に次ぐ世界最大級の国際会議であり、IDB加盟国や国際機関、民間金融機関等の政府代表団や総会のほか、並行してセミナーや多彩な歓迎行事、ツアープログラム、多くの協賛事業等が行われます。同時に中南米地域の民間中小企業への投融资による地域経済の開発促進を目的とした米州投資公社

（IIC）総会も開催され、内外合わせて約五千人の参加が予想されており、これは二〇〇〇年七月に開催されたサミットの二・三倍です。

準備体制

沖縄サミットは大成に終わり、運営について貴重なノウハウを身につけることができたのは確かです。しかし、今度の会議は、規模も違えば、形式も違います。小人数で行われたサミットとは根本的に異なり、新たなノウハウが必要です。そのため、正式決定を待っているのは遅いことから、沖縄総合事務局では五月三十一日に沖縄総合事務局局長を本部長とした「沖縄総合事務局誘致準備本部」を設置したほか、沖縄県・地元経済界でも沖縄県知事を会長として「沖縄誘致協議会」を立ち上げ、誘致活動に止まらない開催準備をスタートさせました。



米州開発銀行年次総会
沖縄総合事務局誘致準備本部
看板掲揚

最後に

沖縄県には、万国津梁（ばんこくしんりよう）という言葉があります。「万国津梁」とは、「世界の架け橋を意味しています。かつての沖縄は、海外諸国へ橋を渡すように船を通過せ、貿易を通して文化交流、人々のふれあいといった交易の拠点として栄えてきました。古くからアジアの国々と平和的、友好的に交易を行ってきた歴史的蓄積、サミットで蓄積された各種ノウハウさらにはホスピタリティに溢れる県民性は、IDB総会を成功に導く大きな力になるものと確信しています。